文化庁長官表彰受賞記念シンポジウム

アートがまちと人にできること

日時　2018年9月9日（日）14：00–15：30
場所　熊本市現代美術館 ホームギャラリー
パネリスト　大西一史（熊本市長）、桜井 武（熊本市現代美術館館長）
モデレーター　大澤寅雄（ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室）

司会　それでは皆様お待たせいたしました。ただいまより、文化庁長官表彰受賞記念シンポジウム「アートがまちと人にできること」を始めます。このシンポジウムは熊本市が平成29年度、文化庁長官表彰・文化芸術創造都市部門を受賞したことを記念して実施するものです。お手元に報道資料をお配りしておりますが、受賞においては「市民参画型の文化財の修復と活用」、「市民との協働を意識した現代美術館の運営」という二つの活動が主な理由に挙げられています。
本日は、熊本地震を経たその後の復興を考える上で、熊本城や現代美術館といった文化施設が担う役割や、文化における熊本市の未来について、大西熊本市長をお招きし、現代美術館の桜井館長とともに語って頂きたいと考えています。どうぞお二人に拍手をお願いいたします。
お二人のご経歴について、詳しくは本シンポジウムのチラシに掲載しておりますが、ここで簡単にご紹介させて頂きます。大西市長は2014年に熊本市長に就任されましたが、2016年に熊本地震が発生、その後は、被災した市民の皆さんの生活再建に全力で取り組むとともに、市民の心のシンボルである熊本城の復興にも柔軟な発想で取り組んでおられます。桜井館長は2008年に現代美術館館長に就任以降、幅の広い展覧会など、多くの人を受け入れる多様な文化事業で、美術館を市民のために開いてこられました。地震の際にはいち早く「美術館を美術館として開館」することで、市民の心の避難所として機能させることが出来ました。
さて、本日のモデレーターは、ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室の大澤寅雄さんにお願いしております。大澤さんは福岡県糸島市在住で、劇場をはじめとする文化施設のアートマネジメント研究で活躍していらっしゃいます。近年は東日本大震災で甚大な被害を受けたホール「いわきアリオス」における、文化からの復興について調査研究をされており、これからの熊本の文化が市民のためにどうあるべきかという事を考える上で、市長や館長と一緒に知恵を出し合うお手伝いをお願いできればと思います。それでは、ここから大澤さんにマイクをお渡しして、お話を進めていきたいと存じます。大澤さん、どうぞよろしくお願いいたします。

大澤　皆さんこんにちは。ちょっと小雨の降る足元の悪い中、沢山の方々にこのようにお越し頂いて本当に有難うございます。ご承知の通り、先日、北海道で大きな地震があり、その前は台風の被害がひどく、その前には西日本豪雨災害、そして大阪北部の地震があり、今年は本当に災害が多い年になっています。

そのような中で、今回このシンポジウムを行うことになった理由として、熊本市が「文化芸術創造都市」という名目で文化庁長官表彰を受賞することになった事があります。その理由の一つには、2016年の熊本地震後に、アートによって町が生き返っていく、そういう取り組みや評価があったからだと思います。
今日は、初めに大西市長、桜井館長にお話を伺う前に、ビデオメッセージが届いていますので、ちょっとそれをご紹介したいと思います。ビデオメッセージを寄せて頂きましたのは、文化庁長官表彰の選考委員長でいらっしゃった九州大学の藤原惠洋先生です。では、再生をよろしくお願いします。

藤原　こんにちは。九州大学教授の藤原惠洋と申します。この度は熊本市の文化庁長官表彰・芸術文化創造都市部門での受賞、大変おめでとうございました。さらには今日、本賞受賞に関して、熊本市の大西市長、現代美術館の桜井館長、さらには大澤寅雄さんが司会運営をされながら、語り合われると聞いております。本来ならば一緒に場を共有して大いに談論風発、そこで沢山の熊本市の今後のまちづくりの在り方について、お話し合いたかったのですが、残念ながら、ビデオメッセージで肩代わりさせていただければと思います。
私はこの文化庁長官表彰の審査を、長く務めてきました。近年は、審査を行う審査員が、一人一都市を推薦し合うという暗黙の了解の中で最終選考が行われており、実際は全国各地に魅力的な素晴らしい町は多々あると思うのですが、この文化庁長官表彰にたどり着くには、やはり大きなハードルがあるのではないかなと思います。今回、熊本市を推挙されたのは、今日会場においでになっていると伺っております若林朋子先生でした。これは内緒にしても仕方がないことなので改めて申し上げますと、その若林推薦を、他のメンバーの先生方が一緒に推し合う中で、熊本市は見事文化庁長官表彰に輝いたのでありました。実は以前、私は熊本市を推薦したこともあったのですが、残念ながらその際は成就いたしませんでした。今回、北九州市、それから岐阜県の可児市の三都市が選ばれたわけですが、三都市それぞれがきわめて個性豊かで、なおかつ色々なバックボーンの違う中で、独特の、他へ普遍的に影響を与えることのできる力強いまちづくりをやる中で、この芸術文化を活かした創造的な営み、人々の活動、あるいは表現そのものが高く評価されていったのだと思います。
私はそもそも熊本出身なのですが、2016年の熊本地震以後、熊本へ戻ることが増えました。私の実家は、阿蘇郡南阿蘇村長陽の長野にあり、そこが被災し、また、私が育った菊池も同じように被災をいたしました。そして、熊本市は、熊本県の中枢の機能をもっているわけですが、これまでの、予想をはるかに超えるレベルで被災された。しかしそこから、不死身の、あるいは不死鳥のように熊本市はよみがえっていかれたわけです。その際に、行政においては大西市長のご活動、あるいは熊本市現代美術館の復興の活動も極めてユニークで、素晴らしいものだったといくつも出来事を思い出すことができます。
そのような中で、今回、文化庁長官表彰へとたどり着く、いくつもの成果が導かれたのではなかったのかなと思います。この文化庁長官表彰を大きなきっかけとして今後のまちづくりに大いに活かして頂きたいとも思っております。今日の集いは、そのようなことをきっと皆さんで話し合われることと思います。微力ではありますが私も熊本出身者の一人として今後の皆様の熊本のまち

づくりに何らかの形で応援あるいはお手伝いをすることが出来ればと思っております。今日の集いに参加できないのは大変残念ですが、どうぞ有意義なひと時になりますことを心から願ってなりません。それでは皆さん、また熊本でお会いさせてください。失礼いたします。

大澤　有難うございます。本当はビデオではなく、藤原先生にこの場でお話を頂きたかったのですが、先生は話をし始めると長くなられるので、ビデオで良かったなとちょっと思っているところではあります（笑）。
一つだけ、ビデオの中に少し紹介がありました、文化庁長官表彰の選考委員の中に、熊本市を推薦された若林さんという方がいらっしゃるのですが、今日お見えになっていらっしゃるようです。よろしければ、ちょっと立ち上がってください。若林朋子さんです。後ほど会の終わりに少し発言いただこうかなと思っています。
さて、改めて、この後、ずっとお待たせしておりますが、大西市長と桜井館長に、お話し頂きたいと思います。どうぞよろしくお願いします。
まず、最初に聞いてみたかったのは、2016年4月の地震に直面したあの日以降、大変なご苦労をされたと思うのですが、お二人に、あの時何を感じていたのか、また、同時に恐らく市民のために何が出来るのかということをお考えになったと思うのですが、まず、大西市長からお聞かせ頂いてよろしいでしょうか。よろしくお願いいたします。

大西　改めまして、皆さんこんにちは。熊本市長の大西でございます。今日はこういう場でお話をさせて頂いて非常に嬉しく思っています。桜井館長や大澤さんと、こういう対話をするという事に、僕は非常に恐縮していて、私のような教養のない人間が話していいのかな、なんていうふうに思ってやってきましたけれども、今日はどうぞよろしくお願いしたいと思います。
それで、地震の直後に何を考えていたのかということなのですが、とにかく私はちょうど四年前、熊本市長になって、マスコミ各社の皆さんのインタビューの際に、「74万の市民の生命・財産を守ります」ということをお約束して市長になったんですよ。だから、最初にあの大きな地震が起きた時には、本当に市民の皆さんが安全で大丈夫な状態なのか、そして例えばこのペットボトルの水を見るだけで思い出します。これは何万本の備蓄があるのだろうと思いましたね。それをどれだけ届けられることが出来るのだろうって。要は一人一人の皆さんがこの地震という辛い局面の中で、恐怖とパニックもある、そういう状況の中で、皆さま方には助け合って頂くしかなく、今、とにかく自分にできることの全てを尽くそうと思って必死だったのが直後でした。
ですから、その時、現代美術館がどうなっているかということも、申し訳ないのですがその時は思い描けなかった。あそこの橋が落ちたとか、病院が倒壊したとか、ビルがどうなったとかそんな事で、とにかく命をどう救うのか、そして一人でも多くの人たちが安心できるようにするために、どうしたらいいのかという事を、全力で最初は考えました。それから少し経って、まったく気持ちにも何にも余裕がない、ずっと寝てない状況の中で、明け方に、災害対策指揮室のカーテンを偶然パッと開けました。そこからは、熊本城が見えるのですが、そこで、鯱から瓦から全て剥がれ落ちた天守閣を見て、思わず声をあげました。「ああーっ」て。それで「ちょっと副市長来て！」って見てもらって、本当にただ事じゃないなと思いました。

その時に、ほかの施設はどうなっているのだろうと思いました。熊本の中の美術館もそうだし、動植物園もライオンが逃げたとかデマがありましたが、そういう所がどうなっているのか。それらは市民生活に実は全部直結しているのですよね。お城というのは、たまたま象徴的にも歴史的にも熊本の中にあり、私たちはその姿をずっと見てきたのです。そういう意味でシンボルなのだと思います。お城のあの姿を見て、泣いた人がいっぱいいたと言うのは、やっぱりそうなのだと思います。その一方で、市長は熊本城のことばっかりしか言わないけれども、私たちの家の方が壊れている、どうにかしてほしいというような声もたくさん来ます。そんな皆さんが、少しでも気持ちを穏やかに持てるようにするにはどうしたらいいだろうかと考えながら、災害対策本部の中で怒号が飛んで、と言っても私が叫びまくっているだけですが、どんどん指示を出して、あれしてこれしてとにかく早く物資を届けてとずっとやっていました。とにかく、精も根もなんか疲れ果てたような感じになりました。
しかし、しばらくしていろんな事が復旧した後で、この現代美術館に来たんです。その前に、連休明けぐらいだったですか、「美術館のオープンを待ち望んでいる人たちが結構いらっしゃるから、現代美術館を開けてもいいですか」って、確か当時の経済観光局長から話があって、「そんな話が来ているんだったら、開けられる状態になったらすぐオープンして」と言って、実際に、その時に多くの人たちが美術館に来られた。
『地震の後で』という、現代美術館の活動記録集があるのですが、実は私のインタビューも載っていて、地震の後でどんな風に感じたかとか、詳細はこれを読んでいただければと思います。これを読むと、地震の時に美術館というのはこんな苦労をするのかとか、こんな色々な事を考えてやっていたのかというのと同時に、美術館をオープンすることによって、人々が日常を取り戻そうとするのだ、という事がわかります。ここの場所ってすごく良い空間なのですよね。街中のど真ん中にあって、そしてこれだけのスペースがあって、いろんな本だって自由に読むことが出来る。素晴らしい絵画やいろんなアートに触れることが出来る。こういう場所っていうのは、本当に心の復興ってよく言いますが、そういうものにつながるのかなと思いました。もちろん、生活していくために、飲んだり食べたりお風呂に入ったり、トイレに行ったり、そういうことが当然満たされなきゃいけないのはもちろんなのですが、それと同時に、また一歩先に復興を進めていくために、こういう現代美術館のような文化施設というものが果たす役割はものすごく大きいんだなというのは、すごくその時に感じました。

大澤　有難うございます。今、ご案内頂きましたこの『地震の後で』という記録集ですが、ぜひ手に取って読んで頂きたいですね。大西市長のインタビューが、本当にすごくて、市長がその立場を超えて、一人の市民として、震災にものすごくショックを受けた後、その感受性がいかにして変化していくかということを、ご自身の言葉で語られていて、素晴らしい記録だと思います。本当にこれは、心がいかにして回復していくかということの証言だなと思って、僕は読みました。さて、お待たせしました。桜井館長の地震直後のお話を聞かせてください。

桜井　桜井です。よろしくお願いします。まず、今度の文化庁長官表彰について少しお話させてください。これには三つの日本の都市、可児市と北九州市と熊本市が選ばれました。その理由の

中で、私が非常に光栄に思うのは、可児市は演劇の町で有名で大変な活動をしていて、それから北九州市は映画でこの賞を取っている。そして、熊本は熊本市現代美術館の活動という形で私どもの名前も出て表彰されたということで、もちろん熊本城の市民とともにある復興が同時にあるわけですが、私どもの震災後の活動がこういう形で認められたということが大変嬉しく、また光栄に思っております。

そして、地震に関して触れるとすれば、私は二つの側面があると思います。まず一つは、個人の生活の中での地震の体験ですね。皆さんと同じように、私の家でも書棚が倒れて、家の中が大散乱する。それから食器棚が落ちてきて、我が家の数少ないバカラのグラスも全部やられてしまう。そこに更に本震がやってきて、これはもう腹をくくらなくちゃいけないという思いになったのです。ただ一つ、大きな救いになったのは、電気がついていた事です。水道は水が濁ってダメですし、ガスもないのですが、電気がつくことで明るくなる。明るさというのは非常に大きいですね。世界にパソコンで通じるし、お湯も沸かせる。この時に、これはなんとかやってけるかもしれない、という印象を受けました。

前震の時に関するエピソードで、私は熊本城の近くに住んでいるのですけど、あの熊本城にカラスの大群が大集結をしていました。深夜にけたたましく鳴いているのを、私は聴いていたのですね。その翌日に、本震が来るわけですが、この時には全くカラスがいなくなっていました。こういう経験をして、熊本にいる自分と自然との関係性というものを、非常に強く感じることが出来ました。

その後、私はもう腹をくくって、ここでやっていこうと思って、それから毎日お昼に市役所に行って、お水とパン一個、翌日はおにぎり一個、その翌日はバナナ一本という形でお昼を提供してもらって、これは大変有難かった。それが私のいわゆる個人的な生活でした。

そして、美術館に来てみると、その様子は、私ももちろん、誰も見たことのないような状況でした。上から色々なものが落ちている。そして、床が真っ白になっているんですね。展示室の壁が微妙にずれていたりして、これは大変なことになってしまったと思いました。皆さんも、果たしてそれからどうするかと悩まれたと思うのですが、我々もこの復旧していく段階というのは、まず精神的に揺れ動くわけですね。それから例えば再開する、という決断をすると思うのですが、私自身は実はあまり悩まなかったのです。ああいう特殊事情の中で、「美術館っていったい何だろうな」と考えると、「やっぱり美術館とは法的な財産であり、文化財」だと思ったわけなのです。我々の責務とは、これらを守らなくちゃいけないということです。美術館のある町全体が暗くなって、ゴーストタウン化しているわけですね。ガラスが落ちているし、非常に危険な状態なのですが、ここで我々がやるべきなのは、やはり光をあてなくちゃいけないという事です。美術館が開くことによって、物理的にも町に光が灯される。そして、非常に暗い状態の中でも、精神的にも光を灯す事を、我々はやらなくちゃいけない。これはすごく大事なことだなと感じました。それは、避難所のような形ではなく、「美術とともに」、「美術館として開ける」ということが、我々にとって最も市民に対して貢献できることだなと思いました。そこから実は大きな苦難も始まっていきましたが、最終的には無事、再開、開館に結びついたということです。

大澤　有難うございます。桜井館長から、冒頭にお話し頂いた文化庁長官表彰の文化芸術創造

都市部門は、平成19年度より実施されていますが、実は、九州の中でも福岡市はまだとっていないのです。僕は福岡市の隣の糸島市に住んでいて、福岡市は九州の中で経済的には一人勝ちのようなイメージがあるのですが、文化的な面で言えば、大分市、別府市、日田市、竹田市がこれまでこの表彰を受けていて、今回熊本市と北九州市が受賞ということで、九州の中でも非常に多様な都市が受賞しているということを、嬉しく思っています。
少し話を戻すと、桜井館長が「美術館を美術館として開ける」ことにためらいはなかったそうですが、逆に言うと「美術館を美術館として開けない」という選択肢ですね、つまりそれは物理的な避難所のような形で開けるという選択肢も考えようによってはあったと思うし、東日本大震災では実際にそのような文化施設の役割もあったのですが、それでもあえて美術館として開けられたというお話をもう少し詳しく聞いてもいいでしょうか。

桜井　もちろん、我々はあの地震の直後には避難所というか、帰宅困難者のために開放しましたが、実際には利用はありませんでした。そういう形での開放はあったのですが、美術館の中には、実際には美術品があり、簡単に開放するわけにはいかないのです。
それから、我々にとっての大きな激励になったのは、地震からしばらくしてかかってきた電話です。「いつ開くのか」、「開けてほしい」というリクエストが来て、これは我々にとって大きな力になったのですね。これも最初はフリースペースから開けて、次にこの奥にあるギャラリーIIIなどの小展示場、それから企画展示室というように段階的に開けていくわけなのですが、いわば、精神的な避難所になっているわけなのです。それと同時に憩いの場であり、くつろぎの場であり、それから楽しみの場です。この楽しみというのは非常に大きいです。
地震の際、美術館はダメージを受けましたが、作品は実はかなりいい形で残っていました。一方、劇場やホールは天井が落ちてきて、全滅状態でした。ですから、私どももここで様々な音楽や演劇、トークなどを受け入れました。結局、それをやることによって人が集まる、人が集まることによって交流が生じるわけですね。その交流というのは、人と人とのつながりが生じていくと同時に、作品と自分が交流していく、作品の中からいろんな喜びや力を得ていくのです。ですから、開けて良かったなという感じがしております。

大澤　この記録集の中にも出てくる「心の避難所」という言葉は、今、館長が言われた「精神的な避難所」のことだと思いました。それは、生命・財産を守るという意味では、物理的なものとは別かも知れないのですが、精神や心を保つための避難所として、やっぱり機能していた。それが本来の美術館の使命でもあるのではないかと。非常時でも、日常であっても、ちょっと美術館へ行って絵を見たいとか、音楽を聞いてちょっと安らぎたいという、一種の避難所の機能を果たしているのではないかと改めて思いました。
再び、大西市長にお聞きしたいのですが、やはり、市民にとっての熊本城の存在は、僕は他の町には無いなと思いました。今回の地震で、熊本市民にとっての熊本城というのは、他の町の市民と城の関係とはちょっと違うような気がしています。そのことについては、いかがでしょうか。

大西　熊本城は、熊本市民、そして県民にとっても、やはりシンボルであり、例えば、大阪城や名古屋城に対して大阪や名古屋の方たちが持つ思いよりも、何か少し違う、強い思いによって支えられているものがあるのではないかと思います。

といいつつ、実は、私は震災直後の最初のインタビューで、記者さんたちから「熊本城があれだけ崩れていますが、どうされますか」と聞かれたときに、「まずは市民の生命・財産が先なので、熊本城のことは今考える余裕がない」と答えてしまったのですが（笑）。けれども、その後に、私も熊本城が崩れている様子を見た時に、自分の心の動揺や揺れ具合を感じて、「これは何とかしなきゃいけない」という気持ちにものすごくなり、文化庁にも強く要望に行きました。実は、現在の天守閣の部分は、昭和35年に再建された再現天守なのですが、それでも他の色々な重要文化財も含めて、これは何としても元に戻さなければいけないと思いました。その色々な議論の中で、とにかく早くやらなければという話もある一方で、丁寧にやらなくてはという思いもあって、非常に揺れました。それだけ、市民にとって存在感の大きいものであり、全国の皆さんがそれをわかっていらっしゃって、多くの方から寄付を頂き、とても有難いことだなと思っています。

ひとつ、印象的なエピソードがあるのですが、東京にいる知人が「家は大丈夫だった？」と電話をしてきてくれて、「うん、大丈夫」と答えると、「お母さんは大丈夫だった？」と聞いて、次に「お城は？」って聞いてきたんです。「お城は？」って聞いた後に、ようやく「お父さんは？」と聞かれました（笑）。なるほど、そのぐらい、お城のことを離れた土地の方が気にして下さったというのは、やはりシンボリックなものであるのだなと思いましたし、そういうシンボルとしての熊本城の存在が、市民の心や、復興していこうという気持ちを一つにするのだと思います。

地震後しばらくは、熊本城の天守閣のところは、ずっとぼろぼろでした。5月の末までは、電気もつけていなかったのです。先ほど、館長が「明かり」とおっしゃったでしょう。当時、熊本の人たちは、何とか今の生活を元に戻そうとしていたのだけれども、みんな下を向いている。夜になると暗い闇の向こうに、ぼんやりとなんとなく壊れたお城があるというのが、自分たちの壊れた生活の状態を映しているような気がする、という声が沢山あったのですね。一方では、壊れているお城をライトアップするのは、やっぱりどうかという意見もあったのです。それで、熊本城事務所に聞いたら、「一個ライトが壊れていますが、あとはつけられます」と言うので、だったらつけようと、6月1日からつけ始めました。すると、皆さんが拍手をされている姿があったり、涙を流している姿があったり、それからみんなが上を向き始めて、お城も再建に向かってスタートを始めることが出来ました。

今は、瓦も全部吹き直して、鯱ものって、またそれを見て元気をもらうという方も沢山いらっしゃるのかなと思います。単に物理的にお城の天守閣があるという事ではなく、シビックプライドというか、町に対してプライドを持っている、市民の皆さん方の誇りや気持ちというかそういったものを取り戻すということが、復興につながっていくのだと私は思いました。

大澤　僕も本当に同じことを考えていて、熊本城に対して、皆さん家族なのか、自分自身か、何かを投影して見ている。傷ついた自分や、家族を見ているように熊本城がそこにあって、それを見ながら一緒に頑張ろうとか、それを支えようという気持ちが誇りにつながっていくような感じを

受けました。有難うございます。
もう少し前半で地震の話を聞いておきたいのですが、実際に「美術館を美術館として開ける」ことができて、復興に向かって色々な活動が始まったわけですが、地震や災害が起こったことで、文化というものはどんな役割に変化したのでしょうか？もしかしたら、「変わっていないですよ」という答えもあるかも知れないのですが、何か地震の前と後で、文化の役割が変化したとお感じになることはありますか？それでは、館長お願いいたします。

桜井　大きな変化があります。それは、具体的には、お客さんの来る数が非常に増えたということですね。これは展覧会の内容や、周辺の施設の復興状況にもよるわけなのですが、一番感じたのは、彼らの様相やマナーが今までと全く違っているのです。多いときには、長蛇の列ができるという難点もあったのですが、あの人混みの割にはトイレが非常にきれいだったし、叫んだりする人もいないのです。これが地震の前だったら、ちょっと違っていたかもしれません。
また、私にとって非常に印象的だったのは、例えば、ジブリなどは、子どもたちが美術館の下から、エスカレーターなどを使わず、階段を駆け上がって来て、駆けおりて帰っていくのです。あの姿を毎日見て、本当にただ単にマナーが良くなったということでなくて、地震を経て、美術館と観客との関係性が変質してきているなという感じがしました。
それからエリック・カールとかアンドリュー・ワイエスの展覧会は、所蔵者の好意により、入場無料で実施する事ができました。エリック・カールは、ベビーカーを持った若いお母さん達の行列がずっとできるわけです。そういう外見的に非常に大きな変化がありました。そして、彼らが作品からどれだけ感銘を受けているかということを含んだ上で、そんな現象が起きたのではないかと、感じました。

大澤　有難うございます。大西市長は地震の前と後とでは、どのように文化に対する考え方が変わりましたか？

大西　私は元々、アートなんかは苦手で、こういう素敵でダンディーで教養ある方々が、色々な難しいことを話されるというのが、よくわかりませんでした。「現代美術」とかって、正直おわかりになりますか、皆さん（笑）。なんか変てこな作品みたいなものがあって、これはわからないだろうって僕なんかはずっと思っていました。
しかし、去年の夏に現代美術館で三沢厚彦さんのアニマルズ展が行われていたのですが、おそらく地震の前までは、作品を見ても「なにこれ？」「でっかい熊？」みたいな感想だったと思うのです。ところが、地震後に、災害復旧などで「市長は何をやっているのだ」とお叱りを受ける、職員とも意見がぶつかったりするという状態の中で、ふっとこの美術館に来て、その作品を見た時に、グワッと来たんですよ。「現代美術」はよくわからないと思っていたのですが、何というか、作品から、圧倒的な「何か」が出てくるのです。それを、知らないうちに、自分が吸収しているのです。現代美術は「分かる」、「分からない」とかそういうことではなくて、感じればいいのだと気づいたのです。「あ、そうなのか」と。

例えば、今は蜷川実花さんの展覧会が行われていますが、「蜷川実花に負けないぞ」と思って、今日は派手な赤いネクタイをしてきました（笑）。その話は別としても、この世界をどう解釈するか、その人次第であって、自由でいいのですよ。そこに何というか、表現を感じて、なぜか涙が出てくる、感動する。地震を経て、私はそういうことができるようになった。表現を受け取ることができるようになったと思います。災害がなかったら、おそらくそこまで感じなかったでしょう。感受性が高まってきたという事があるのですよね。色々なことがあって、涙もろくなったりするじゃないですか。震災の直後は、音も無ければ、色も無い、明かりも無ければ、匂いも無く、何というか本当に「無」の世界でした。そして、僕は地震後の6日目か7日目に、市役所の指揮室から下に降りていって、下通に入ったのです。あのにぎやかな、活気がある通りではなく、町が死んでいました。人っ子一人歩いていない。ココサがある前のところにはバリケードが張ってあって、上からアーケードが落ちてくるかもしれない。そんな状態で、不気味だったのが、美術館が復活をして、そこに来て、何かを感じられるようになったというのは、大きな変化だったと思います。だから今もやっぱり求めるようになりましたよね。音楽を聴いたり、絵を見たりしても、表現者がそこに込めたものを受け取ろうという感覚に初めてなったような気がしますね。
アンドリュー・ワイエスにしてもニューヨークにいた時に、散々MoMAで見ているのですよ。ミッドタウンも近く、何ヶ月もいましたので、しょっちゅう行っていたのです。当時はそこまで思わなかったのですが、現代美術館で展示があると聞いた時に、時間がないけど見に行きたいなと思いました。今日もこのお話が終われば、夜の用事までの間に、少し蜷川さんの展示も見られるなと考える。表現者が込めたものを、受け取ることを求めるようになったというのは、地震のショックでもあったかもしれないし、辛かったからこそ、逆に喜びを求めるようになったような気がしますね。

大澤　有難うございます。地震の話をずっと聞いてきましたけれども、ここで映像をちょっと見て頂きたいと思います。熊本地震後に、熊本市現代美術館で行われたここで企画展「特撮美術×熊本城　天守再現プロジェクト」の短い紹介映像です。それでは、再生をお願いします。

「熊本城×特撮美術　天守再現プロジェクト」記録映像の再生（約5分）

大澤　有難うございます。この映像は、実際は30分位あって、DVDも販売されているそうなんです。僕はそれを見せて頂いて、本当に笑いと涙と両方の感動がありました。まず、基本的なことをいうと、これは2017年の12月から、2018年3月まで行われた「熊本城×特撮美術　天守再現プロジェクト」展の記録映像だったのですが、おわかりのように、映画『シン・ゴジラ』の特撮監督を務めた三池敏夫さんという熊本出身の方が指揮をとり、熊本城を精緻に再現されて、それを展示するという内容です。今、映像を見て頂いたように、市民ボランティアの皆さんがお城の周りのミニチュアの町並みを作っていったのです。最後に、インタビューに答えていらっしゃった若い女性の方は、ご自身がまだ仮設住宅に入っているのだけども、美術館にボランティアに来て、ものすごく細かいミニチュアの町を作るお手伝いをしていたのですね。
そのドキュメンタリーの中で、三池監督が「特撮美術とはいったい何か」という問いに、「特撮とは、

現実を再構築する仕事です」と答えられたんです。僕はこの言葉を聞いて、特撮とは、現実を再構築する仕事なのだけれども、市民自身がそのミニチュア作成に関わって、例えば、ベランダの物干し竿にかかったロアッソ熊本のユニホームを作るというような作業を通して、失われた現実を取り戻そうとしているのを見て、本当に涙が出ました。
先ほど、大西市長が、「現代美術って何を言っているのかよくわからなかった」とおっしゃっていましたが、「現代美術館は現代の美術館だ。だから現代に生きる私たちの美術館なのだ」、「現代美術の館であると同時に、現代の美術館なのだ」と美術館の学芸員さんがおっしゃっていて、いい言葉だと思いました。僕は「現代の美術館の役割」ということを、すごく大きく感じた展覧会でした。ぜひ皆さんもDVDをお買い求めください（笑）。
さて、それでは、後半に入りたいと思います。「これからの話」をぜひ聞かせて下さい。熊本地震から二年たって、アートや文化が市民にもたらすもの、市民や地域を変えていけるものっていったい何なんだろうと、ちょっと大きくて抽象的な話なのですけども、伺ってみたいと思います。例えば、近年は、色々な社会的な課題にアートの力を活用するということもよく言われていますが、そのあたりのことについてぜひお二人のお考えを聞かせてください。大西市長からでよろしいでしょうか。

大西　「アートが市民にもたらすもの」という事に関して、先ほどの展示についても、『シン・ゴジラ』の町並みを作った人が熊本出身だったなんて、それまで知らなかったのです。今回、それを一緒になってミニチュアを作りあげようという事に非常に大きな意味があって、自分たちの町をアートで取り戻そうという時に発揮される力は、非常に大きいなと思いました。個人的にはやっぱり人と人や、作品との交流の場として現代美術館を中心にまた作っていくのが大事かなと思います。フィードバックベターとよくいいますが、やはり震災前よりもいいものにしていく。その時に対話する場所としての現代美術館があってもらえればいいなと思います。
それから、アートというものが、やはりもっと見直されるといいと思います。行政施設って意外と絵とか、結構いいものが飾ってあったりするんですよ。例えば、熊本県立劇場に行くと、素敵な絵が実はたくさんかかっている。音楽を聴きに行くだけではなくて、実は美術作品が置いてあることに、普段はあんまり気がつかないんですよね。例えば、好きなアーティストのコンサートや、クラシックの演目を聴きに行く時に、そういうものを日常的に感じられるような町にしていくっていうのはすごく大事なところだと思います。
熊本市役所の5階には、市長室や秘書室があります。そこは応接間でもあるので、結構いい絵が飾ってあるのですが、震災の時には落ちたり、あるいははずして割れないようにしたりしていました。地震後少し経って、実は日常の中で意外とアートに知らないうちに触れていたのだなと思いました。皆さんのお宅でもそうだと思いますが、地震で絵が外されたときに、日に焼けた壁の跡や染みを見たときに、すごく寂しい感じがした。日常的には、そんなに意識してなかったのに、実は無意識のうちに、そういうものを与えてくれているのだなということを、思うようになってきました。
大きな災害が起こった時に、このような「アートの力」を皆さんにもっと分かりやすく伝え、場を提

供していく事が重要で、また、それは行政の役割でしか、出来ない事なのではないかとも思うのですよね。そんな機会をたくさん作っていければと思いますし、この現代美術館でも企画展など、色々な催しがあって、多くの人達がこうやって集まることによって、熊本市はやっぱり、文化庁長官の表彰を受けるだけの文化を持っていて、皆が地震の後もさらにパワーアップしてそれを作っているという、そういう町にしたいなという思いがものすごくありますね。

大澤　有難うございます。桜井さんいかがでしょうか。

桜井　先ほども少し触れたのですが、他のホールで出来ない、色々な音楽会などが美術館で行われて、佐渡裕とスーパーキッズ・オーケストラや山田和樹が来て、第一級の演奏が行われました。やっぱり、音楽の力って、大変強いと思いましたね。
例えば、被災して被害がとても大きかった地域で、娘さんが「ピアノの練習を始めたい」と言ったら、お母さんが「そんなことをやっちゃいけない」と言ったそうなのですが、ある時、音を小さくして練習を始めたら、そこを通ったご婦人が、ひどく感動して衝撃を受けた、という話がありました。だから、音楽の持つ力って、すごいわけです。単なる練習でも、人を打つ力がある。その当時、美術館で行われたのは美術展だけでなくて、音楽も演劇も、ダンスもおこなわれていました。「ミュージアム」の語源は「ミューズ」であり、つまり、美の女神ですね。美の女神が住む館なのです。まさに、その原点に来たのだなとそういう思いが強くありました。
それから、もう一つ付け加えたいのが、美術の効能です。私どもも、また県立劇場でも、各学校へ出かけていって、アーティストとワークショップを実施し、音楽家を連れて行って、コンサートやワークショップを積極的に行っています。こういう美術教育は、日本では全体として低調になっていて残念なのですが、例えばイギリス、アメリカでもそうなのですけど、1年とか2年この活動を続けているうちに、数学と読解力が上昇しているというデータがあるわけです。すぐに結果が出るような、即効性はないですが、必ず美術なり、あるいは音楽、演劇は、そういう他の学科と結びつくわけですね。それは、創造性、クリエイティビティの問題なのですが、創造性を促すことが大事であり、それを促がすことによって他の学科にも興味を持ち、学力も上がるという効果も実際データとして出ております。

大澤　有難うございます。今、館長がお話の中で、美術やアートというものが、何か即効的な成果、効果があるわけではないのだけれどもとおしゃっていました。僕も仕事として、社会の中で芸術文化がどのような役割を果たすのか、またどのような効果があるのかということを言う時に、経済的な側面での効果は、それはそれであるのですが、そこにとらわれると非常に短期的なものの見方しかできなくなってしまうというジレンマがあります。
僕は実は今日、お城に行ってから美術館に来たのですが、修復途中の大量の石垣を見て、あれが何年かけて再生されることになるのか、一個一個の石を元に戻していくという気の遠くなるような作業をおやりになっていることを知りました。これは技術や金をそこに投資して、形だけ復元しようと思えばできるかもしれないけれども、あの作業を目の当たりにして、もちろんスピード感

が求められる所はあると思いますが、文化というのは急ぎすぎないほうがいいという側面もあるのではないかとも感じました。
さて、ここで質問としては最後になります。20年後の熊本市、そこで暮らす市民のために、市長や館長はこれから何にチャレンジしたいかということを伺いたいと思います。館長から伺っていいでしょうか。

桜井　20年後と言われると、果たしてその時、自分が生きているかどうかということを考えますね（笑）。20年後には、世界や世の中は、どんどん変わってくわけです。何が起こるかわからない状態になり、状況や世界観、価値も変わるとすれば、芸術表現が変わってくるわけですね。うんと新しい、今まで信じられないような表現が生み出されてくる可能性がある。美術館の責務としては、それに対応して、そういう新しい芸術を市民に知らせていくという責任がある。
もう一つは、やはりこの美術館が、どういう状況にあろうとも、よく賑わって魅力のある、市民にとって必要とされる美術館でありたいと、こういう思いが私にはあります。お城の20年というのは、それほど長く感じないのですが、いざこの美術館の20年先というと、かなり先に感じます。ある意味、お城と共にね、この変化を乗り切っていければと思います。

大澤　有難うございます。大西市長いかがでしょうか。

大西　そうですね。ちょうど20年というと、熊本城の石垣が震災前の状況に全て戻るのが20年後ということで、今、復旧基本計画を作っています。その頃には、恐らく震災前の状態、あるいは、それ以上のものになっているかもしれません。そのぐらいの時間なのですが、20年って言ったら、だいたい2040年頃ですよね。その頃の熊本市は、人口が減り、高齢化率が非常に高くなるのですが、ネガティブなことばかりじゃなくて、この20年の中で、人がもっと長生きでき、健康で過ごせるようになると考えることが出来るとも思います。
熊本市は「上質な生活都市」を目指すということをずっと市長になる時から言っていますが、その上質さとは、やっぱり文化にあると思うのです。私は20年後に、熊本のこの現代美術館や様々な文化施設が、世界的に誇れるものしていきたいと思っています。だから、そのために今、色々やるべきことがある。
例えば、イギリスに、ビートルズが生まれ育ったリバプールという町があるのですが、震災の前の事ですが、イギリスがラグビーワールドカップの開催地でしたので、次期開催都市の人達みんなで一緒に行った時に、私はリバプールに足を運んだのです。リバプールは、一時、不況により町全体が落ち込みましたが、欧州文化首都として存在感を発揮していました。だから、まず熊本市は、九州文化首都になって、20年後にはね、やっぱり東洋文化首都じゃないですけど、アジアの文化首都になるぐらいまでのことを目指す。
それは、何か素晴らしい美術品や美術家がいるとかいうことではなくて、人々がアートに触れる、そしてそれを会話の中で対話の中で、どんどん語っていけるような状況にしたいですね。先ほど、現代美術やアートがよく分からないと言いましたが、みんな実は「分かっているふり」をしている

だけじゃないかなって思うのですよ。
やっぱり、「私はこれをこう受けとったのですが、館長はどんなふうに受けとりましたか」っていう対話をするのが、すごく楽しい。そうすると、ただ単にその辺でお茶を飲んでいるだけではなくて、文化的な会話が弾む町っていうのがいいと思うのです。地震を経験したからこそ、そういう大切なかけがえのないもの、ただ単に衣食住が足りているだけではだめで、そういう心の潤いを、生活者の皆さんが感じられる。量はたくさんなくて、少なくてもいいと思うのです。
例えば、今日は、肥後古流の小堀さんがお見えになっていますが、肥後古流のお茶の文化は、量ではなくて質という私の感覚とすごく合う感じがするのですが、例えばそういうものが、今まで歴史的にずっと、熊本には息づいてきたのですよ。ということは、こういうものにもう一回、皆さんに触れていただく、そして、知っていただくことによって、市民の皆さんがその価値を再発見するのではないかと思います。
現代美術館に、まさにこれだけの皆さんがやって来て、話を聞く場になっているということは、20年後には、この輪が美術館を中心にしながらも、街中や、熊本の至る所で皆が会話や対話して文化について語れれば、私は、ヨーロッパの方で、アジア文化首都の熊本っていうすごい町があるぞ、ということを20年後に言ってもらえるような町にできるように、これから頑張っていきたいなと思っています。

大澤　有難うございます。市長に「アジアの文化首都を目指す」と言って頂くと、もう僕は今日ここにきた仕事を果たしたようなものですね。確かに、「九州の文化首都」という表現は、違和感がない言葉になってきていると思うのですね。というのは、冒頭にも、福岡市の悪口ではないですが、福岡にも頑張ってほしいのだけれども、要するに今の状況で、東京からの文化をただ地方に流通させるだけの都市になったら、もう20年後は全く存在価値がない状態になるだろうと思うのです。熊本なら熊本の文化、熊本市民がいかに生き生きと文化的な生活を楽しんでいるかどうかが日本の中で、アジアの中で、意味を持っていく。そういう世の中に僕は確実になっていくだろうと思っています。
さて、ここまでの話をずっとお聞きになって何かこう言いたい事がある方は、できるだけ、もし多くの方が発言されるかもしれないので、短い言葉で質問なりご感想なり聞かせていただけるとありがたいですが、いかがでしょうか。

質問①　熊本というのは、漢字は動物の「熊」と書きますね。あれは、豊臣秀吉が間違えて書いたらしいのですけど、大西市長いかかでしょうかね？

大西　元々は、菊池の隈府や、大隈重信の「隈」だったそうですが、要は、加藤清正が熊本に入って来た時に、名前をそこで勇敢な「熊」という字に変えたと言われていますが、どうですかね。今日は、ちょうど後ろに、熊本城調査研究センターの偉い人がいるので、正解を聞いてみましょう。

網田　熊本城調査研究センターの網田です。正しいことと言えるか分からないですが、菊池の隈府の「隈」の字は、狭いとかそういった意味で使われていますので、おそらく地形を表していて、茶臼山からこう狭く突き出た尾根の名前だと思います。清正が新しい城を茶臼山に作って、その時に字を改めるのですけど、今、我々が認識しているのは、縁起を担ぐ意味で、勇猛果敢なイメージの「熊」の文字に変えたのではないかと考えています。ただ、諸説ありまして、何が真実なのかというのは、まだ分からないですね。色々な説を考えて頂けると有難いなと思っています。以上です。

大澤　有難うございます。いきなりなんか知的水準の高い質問ですね。

大西　すごいですね。一応、知ってはいたのですが、あそこまでは解説できないので、ちょうど目が合った専門家にお願いしました。でも、こういうことを質問して頂かないと知らなかったっていう若い人がいるし、「熊本には熊がいるんですよね？」とも言われますしね。

大澤　それはよく聞かれるでしょうね。

大西　動物園にはいますが、野生では生息していないと言われていますね。

大澤　有難うございます。それでは次の方お願いします。

質問②　私は普段、色々とイベントをやっていて、国との絡みなどもあると思うのですが、熊本城の二の丸広場で有料催事ができるような手立てとか、そういう考えはどうなのだろうと思いまして質問させて頂きました。

大澤　はい、有難うございました。これは市長にお答え頂いていいでしょうかね。

大西　私だけでちょっと答えられないところもあるのですが、実は、二の丸広場は現在、国の特別史跡エリアの中にあるので、自由に何でもやっていいっていう場所ではなく、一定の制限があるのです。震災後、県立劇場も熊本市民会館も被災して、誰もこのいろんなことをやる場がなくなった時には、二の丸広場に限定的に一年半ぐらい特設ステージを作って、色々な催し物をやりました。
しかし、普段、催し物を行う時には、文化財保護の審議会みたいなものがあって、そこでやっぱりきちんと議論をしなくてはいけない。それともう一つ、国の特別史跡でもあるので、我々はその財産の管理をしているという形になっています。そういうこともあって、そこの財産で営利になる事をやってはいけないというのが、原則としてあるのですね。
だから、そういう意味では、なかなか簡単ではないなと思っています。私も音楽をやるし、熊本城フェスのような催しがやれればいいなと思うのですが、一方で現在、桜町に熊本城ホールと

いうものを作っていますので、そこでやって頂くというのもいいのかなと思うのです。
実は先日、熊大の方に行ってきたのですが、かつて二の丸には、色々なお屋敷があったというのは皆さんご存知ですか？これがね、ちょっと写させてもらった写真なのですが…、平面図のような古文書があって、あそこには第二高校もあったのですよ。

会場　へぇ。

大西　へぇって思うでしょう？今は東区に移っていますが、例えば、二の丸が歴史的にどのように使われて来たのかという事を、多くの皆さんに知っていただくことも必要かなと思っています。そういった歴史を知りながら、皆を楽しくお花見をしたり、イベントするにしたって、リスペクトをしたりしながらやるのは違ってくると思うのですよね。昔は、殿様の屋敷だったけれども、今は民に開かれた場所でもある。
私としては、あの場所がこれまでどう使われてきて今に至るかということを、まずちょっと整理した方がいいかなと思っています。二の丸屋敷のことを話し出すと、また一時間ぐらい色々と喋っちゃうので、詳しくは別途聞いて頂ければ幸いです。

大澤　恐らく今、文化財保護法もだいぶ変化があって、文化財をどのように活用するかという計画作りなども進められていると思いますので、是非意見があったらお願いします。他にないでしょうか。

質問③　本日は有難うございました。高校で美術を教えているのですが、今からアーティストとして、美術畑に進もうとする若い人たちが、まさにこのテーマ「アートが社会に何をできるのか」という事を、すごく問われた状態で学んでいて、進学するためにも必要になってくると考えています。そういう、新しくアートを追求したいと思っている若者たちに、どういう学びの視点を持ってほしいかというものがあれば、それぞれご意見を言っていただければなと思います。よろしくお願いいたします。

大澤　有難うございます。館長、いかがでしょうか。

桜井　もちろん、アートですので基本的には、非常に個人的なものですね。出発点も個人的ですし、展開していくのも個人なのです。それが、最終的に、果たして社会とどう結びついていくか、それが、どういう作品であるかという事も関わって難しいですね。ただ、基本としては、その学びのプロセスがすごく大事だと思います。その人の生きがいにも結び付いていくので、これは極力激励していきたい。美術館としてはより多くの機会を与えて、様々なアートを見てもらって、彼ら、彼女らのこれからの制作に関わる中での展開につながっていけばと思っています。
社会とどう結びつくかという点に関しては、最終的にはそういう人たちが増えていく事で、必ず、例えば熊本なら熊本市の創造性に結びついていくと思うのですね。いろんな表現をして、それ

が発表されて、他の人と連携し、コミュニケーションを取っていくということによって、必ずクリエイティブな状態になっていくのでね。これは市、あるいは県とも密接に結びついていくので、大いに激励してあげたいなというふうに個人的には思っています。

大澤　有難うございます。市長もお願いします。

大西　僕はやっぱり、アートとかアーティストという人は、自由でなければいけないって思うのですよね。色んなものが解き放たれて、表現をする。ただ、それと同時に、その表現も、共感を生むというのが、すごく大事なんじゃないかなと思いますね。自由にやっていいのだけれども、誰かがそこで、その作品を見たり、あるいは音楽を聴いて涙を流したりというように、そこに込めた表現が相手に伝わるかどうかっていうところが、すごく大事なんじゃないかなと思う。
私自身もプロのドラマーを目指して、ずっと高校時代から音楽をやってきました。ビートってあるじゃないですか。ズンタッ、タタタンっていうような8ビートや、16ビートですが、それを練習すれば、同じようにみんなある程度、叩けるわけです。だけど、同じビートを叩いているのに、どうしてこんなに表現が違うのだろうとか、感じ方が違うのだろう、この人の叩いた8ビートだとすごく気持ちがいいのに、この人が叩く8ビートだとどうものれない、みたいな事がある訳です。
それは自己満足の世界なのかもしれないけれど、やっぱりそうやって共鳴をしていくっていうのは、アートの表現者としてはすごく大事なことなのではないかなというふうに思います。だから、そういう意味では、「自由と共感」みたいな事があるといいなと思います。すみません、なんかあんまり造詣深くなくてね。
答えがあんまり大したことがないのですが、僕は、美術の成績がずっと「2」だったので、そもそもコンプレックスがあるのです。ちょっと話が脱線しますが、それで美術が嫌いで、美術館に来るなんてもう考えられなかったです。デッサンとか難しくてしょうがなくて、ずっといい点数を付けられなかったのだけど、中学校三年生の時に、ポスターを描くことになって、美術の先生がね、「大西君、自由にやっていいよ」「あなたが感じるままに、見たままに描けばいいから」って言ってくれたんです。それで、一生懸命に、自由に自分なりのできる範囲でやってみたのですよね。そしたらね、「2」が「3」になったんですよ。これがね、音楽が5だとか、英語が5だとかっていう事より、もうこの「2」が「3」になったっていうのが、どれだけ自分にとって嬉しかったか。ちょっと関係ないですけど、美術の先生だから、得意な人ばっかりじゃなくて、苦手な子がそうやって自信を持つように励ましてあげて頂きたいなということをちょっと思い出しました。

大澤　いや、素晴らしい答えだと思いますよ。今の質問していただいた先生が教えている子が、20年後、30歳とか40歳になって、たぶん熊本市を変えていく一人になっていくのだと思うのですよ。すごくそれを期待させる、質疑応答だったと思います。
時間がちょっと過ぎたのですが、もう一人だけ、最初に紹介した若林さんのことも少し紹介します。今日、お手元に、「東日本大震災、芸術・文化による復興支援ファンド」と書かれた小さな冊子があると思います。僕はこの報告書の作り手側だったのですが、このファンドそのものをお作りに

なったキーパーソンが若林さんで、当時、企業メセナ協議会というところでプログラムオフィサーとして活躍されて、一億くらいだったかな、その後の東日本大震災の文化芸術による復興支援で大きな支えになったファンドをお作りになった方です。その若林さんが、今回熊本市を文化芸術創造都市に推薦されたということがあって、今日実は、自費で来て頂きました。若林さん、ちょっとお話をお願いします。

若林　ご紹介頂き有難うございます。記念シンポジウムの開催が本当に嬉しくて、もうこれは駆けつけなきゃとやってきました。
賞を受け取って頂いたことも嬉しいのですが、その後、こうやって語らいの場を設けて頂いて、皆さんの言葉を聞ける事が本当に何よりです。市長さんが仰っていたように、「対話をする美術館」が、もうこの場から始まっていると感じました。
あまり公にされないのですが、せっかくなので、私が何故熊本市を推薦したかを、お話しします。推薦にあたって、私は小さな町か、その年にこそ受賞がふさわしい町、いずれかを考えるようにしています。昔は小さな町を推薦しました。2017年度に関しては、この年だからこそ熊本市だと思ったのですね。きっと「地震があったからだ」と思われるだろうなぁと。でも、地震が直接の理由ではありません。
まさに今日のシンポジウムのタイトルになっているのですが、その年に一番、アートと町や、アートと人、文化と町、それから文化と人との繋がりを、どこよりも考えた所にこの賞を受け取って頂きたいなと思ったのです。それで思い浮かんだのが熊本でした。桜井館長も仰っていたように、震災後の美術館の復旧や復興に関する取り組みや、その後の展覧会、それから、熊本城の復興に、市民、県民が一丸となって寄付をする様子。2017年度は最も印象深く、それで推薦しました。
もう一つ申し上げたいのが、熊本市に関しては、地震前からの積み上げがあったことも大きいです。この美術館も、大変先駆的な取り組みをしてこられた。硬派なテーマの展覧会もあれば柔らかなものもありますし、日本で唯一、美術館の中に子育ての支援拠点を持っていて、こうやってオープンスペースがあって、美術館、展覧会を見なくても皆が集えて、ゆっくり、ほっこりできる場がある。そういう取り組みを、既に震災前からなさっていた。
それから、お城に関しても、今は「復興城主」となっていますが、「一口城主」という市民参加型の取り組みを早くからされていたからこそ、すぐに「復興城主」という参加型募金に移行できたのではないかなと思っています。ですので、決して地震という辛い出来事があってそこから頑張っているということではなく、前からの取り組み、市民、県民の皆さんと共にこういう文化が今ある町なのだと思って推薦した次第です。
私は東北の復興支援に関わってきたので、最後にお伝えしたいのが、記録集が、本当に素晴らしいと思いました。美術館スタッフの方が、本当に大変な中で作られたものだと思います。阪神・淡路大震災時は、震災直後から記録を残すことなどは思い至らない時代でした。東日本大震災では、津波や原発のこともあって、記録することの重要さは分かっていてもままならない、直後から記録しにくい状態もありました。今回の熊本では、発災直後のことから、非常に丁寧に、市民の方々の声も交えて、スタッフの方の取り組みが詳細にわたって記録されています。是非これを広く

共有できたらと思っています。どこで地震が起きるか分からなくなった昨今、全国の文化施設の大切なガイド、時には光になるだろうと思いながら、改めて今日拝見いたしました。長くなりましたが以上です。

大澤　有難うございます。時間がちょっと過ぎてしまいましたけど、お二人とも、何か一言だけ、おっしゃりたいことはないでしょうか。

桜井　今回、大変賑わった蜷川実花展の最終日にこういう企画が行われて、非常に幸せに思っています。それから、今の素晴らしいコメントを頂いたように、いろいろなサポーターの方に恵まれて、本当に力強い感じがして、喜んでおります。有難うございました。

大西　こういう場をできるだけたくさん作っていきたいですね。対話をする美術館、対話をする町、対話を楽しむ町に。そして、僕は熊本を「寂しくない町」にしたいのです。いろんな人が、寂しくない町に。孤独を愛する人でも寂しくない町、そういう町を目指して、20年後、アジアの文化都市を目指して頑張りたいと思います。それには、皆さんの協力が無いとできないので、よろしくお願いします。有難うございました。

大澤　長時間、お付き合い頂いて有難うございました。私は今日をすごく楽しみにしていて、そして、楽しみにしていた以上の話が聞けて、本当に嬉しく思います。文化芸術創造都市にふさわしい対話の場であったと思いますし、ここで対話されていることを、今、災害で大変なことになっている町にも伝えて、希望にして、熊本がそういう被災された町を勇気づける役割を今後も果たして頂きたいなと思いました。今日は皆さん、どうも有難うございました。市長と館長に大きな拍手をお願いいたします。有難うございました。

司会　大西市長、桜井館長、そして大澤さん、有難うございました。こちらの熊本地震記録集『地震の後で』は、本日よりホームページにてPDFで公開しております。
もう一つサプライズがあるのですが、蜷川実花展が本日、最終日に4万人を突破いたしました。ぜひ、大西市長にプレゼンターとなって頂きまして、この後引き続き、セレモニーを実施したいと思いますので、どうぞご参加ください。本日は皆様、どうも有難うございました。

編集：坂本顕子（熊本市現代美術館学芸事業班主査・学芸員）